

一九三三年



五月



太陽

日	赤 經	赤 緯	視直徑	星 座
1	2時32分24秒	北14度59分	31分47秒	ひつじ
11	3時11分 1秒	北17度48分	31分43秒	ひつじ
21	3時50分35秒	北20度 7分	31分39秒	うし
31	4時31分 1秒	北21度53分	31分36秒	うし

月始めは金牛宮にあつて、6日にその中央を通過する。即ち此の日は立夏である。併し21日には金牛宮より双子宮に侵入する。即ち此の日は小満である。又た88夜は2日であつて、立春の日(2月5日)から計へて88日目に當り、此の頃になれば最早や寒さも殆んどなくなると昔から傳へられてゐる。時差は今月は凡て太陽が時計の正午よりも早く南中して、1日には2分56秒、14、15日は3分47秒で最大で、以後は次第に渺なくなり、31日には2分35秒となる。地球からの距離は月始め1億5000萬軒餘り、月末1億5100萬軒餘りである。

日の出は1日5時7分、11日4時57分、21日4時49分、31日4時45分、日の入りは1日6時42分、11日6時50分、21日6時58分、31日7時5分である。

月の相	時 刻	視直徑	星 座
新 月	6日午前 3時12分	29分31秒	ひつじ
上 弦	13日午後11時 2分	31分30秒	かに
満 月	20日午後 2時 9分	33分20秒	てんびん
下 弦	27日午後 1時54分	30分23秒	みづがめ
遠地點通過	4日午後 6時48分	29分27秒	うを
近地點通過	19日午後 3時 0分	33分23秒	てんびん
昇交點通過	2日午前 6時12分	29分36秒	うを
降交點通過	16日午後 1時54分	32分37秒	をとめ
昇交點通過	29日午前11時54分	29分47秒	うを

遠地點通過の時の地球からの距離は40萬5000軒で、近地點通過の時の距離は35萬8000軒にまで近寄る。即ち月から地球まで光が到達する時間は僅かに1秒餘りである。

月の出は1日午前2時50分、6日午前4時53分、11日午前8時46分、16日午後2時20分、21日午後8時35分、26日はなし、31日午前2時2分である、月の入りは1日午後2時40分、6日午後7時27分、11日午後11時55分、16日午前2時4分、21日午前5時6分、26日午前10時32分、31日午後3時23分である。(MI)

遊 星 界

水 星 暁の東天に輝やいて、8日午後6時には西方最大離角26度25分となつて、観望の絶好期である。但し朝寝しては見られぬ。詳細は「太陽系」の頁を参照。星座は「う」を「座より」ひつじ座を順行する。地球からの距離は月始め1億軒で、8日頃は1億2000萬軒、月末には1億8000萬軒となる。

1日午前 9時の位置は	赤經 1時 1分34秒4	赤緯北 3度52分26秒
8日午前 9時	1時22分 2秒3	北 5度18分23秒
16日午前 9時	1時56分14秒4	北 8度37分30秒
31日午前 9時	3時28分49秒6	北17度30分 2秒

視直径は月始め9秒²で8日頃は8秒¹であり、月末には5秒⁵に減ずる。光度は月始め正1等¹であるが、8日頃は正0等⁶となり、月末には負0等⁶に増す。

金 星 宵の明星として愈々その真威を發揮して、23日午前8時には**最大光輝**となつて白中でも見られる様になる。望遠鏡でみると。月始めは半月型であるが、次第に視直径が増すと共に缺けは大きくなり、月末には三日月型になつて了ふ。宵に見る金星の観望好期は今月までであつて、後は八月以後曉での観望がよくなる。地球からの距離は月始め 9500萬軒であるが、月末には6000萬軒に接近する。

1日午前 9時の位置は	赤經 5時39分41秒8	赤緯北27度 7分45秒
16日午前 9時	6時31分46秒2	北26度55分17秒
31日午前 9時	7時 3分29秒2	北25度17分 7秒

視直径は月始め27秒⁰であるが、月末には42秒⁰にまで増す。光度は月始め4負等¹であるが、10日頃より月末まで負4等²の最大光輝を持続する。

火 星 暁の東天にあつて大體水星と並んでゐるが、まだ観望に好都合ではない。地球からの距離は大體3億4000萬軒である。

1日午前 9時の位置は	赤經 1時19分59秒2	赤緯北 7度38分28秒
31日午前 9時	2時45分52秒0	北15度32分58秒

視直径は月始め2秒⁰、月末2秒¹で、光度は正1等⁵を持続する。

木 星 金星と共に宵の空を賑はす。夕刻5時か6時頃に南中する様になつたのでそろそろ観望の時期もあと少しになつて來た。4日午後4時に東矩となる。地球からの距離は月始め7億8000萬軒であるが月末には 8億4000萬軒となる。

1日午前 9時の位置は	赤經 9時 4分29秒4	赤緯北17度43分 4秒
31日午前 9時	9時17分 0秒3	北16度45分17秒

視直径は月始め35秒³であるが月末には32秒⁴となる。光度は大體負1等⁶である。

土 星 夜半頃東天に昇るので今後観望には都合がよくなり、加之視直径も次第に増して行くので一層有利である。地球からの距離は約14億軒である。

16日午前 9時の位置は	赤經20時28分42秒3	赤緯南19度21分22秒
--------------	--------------	--------------

視直径は月始め15秒²であるが月末には15秒⁹となる。光度は大體正0等⁷である。15日午前9時に停留となり、それ以後逆行に移る。

天 王 星 暁の星であるが月末にならぬと太陽光芒から離れない。

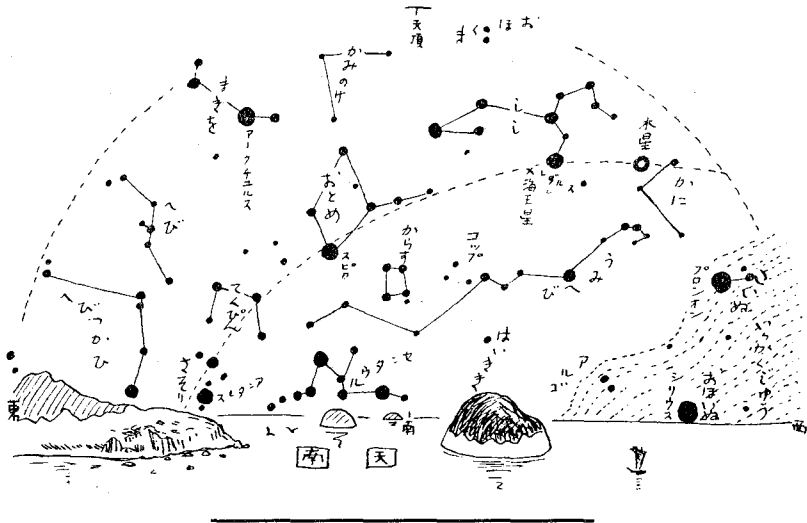
29日午前 9時の位置は	赤經 1時22分 3秒8	赤緯北 7度59分41秒
--------------	--------------	--------------

視直径は3秒⁴程で光度は6等²。地球からの距離は約31億軒である。

海 王 星 地球からの距離は大略45億軒で視直径2秒⁴、光度7等⁷。27日午前3時に東矩となる。

17日午前 9時の位置は	赤經10時29分16秒3	赤緯北10度20分26秒
--------------	--------------	--------------

冥 王 星 宵の星ではあるが観望の望は全くない。(M1)



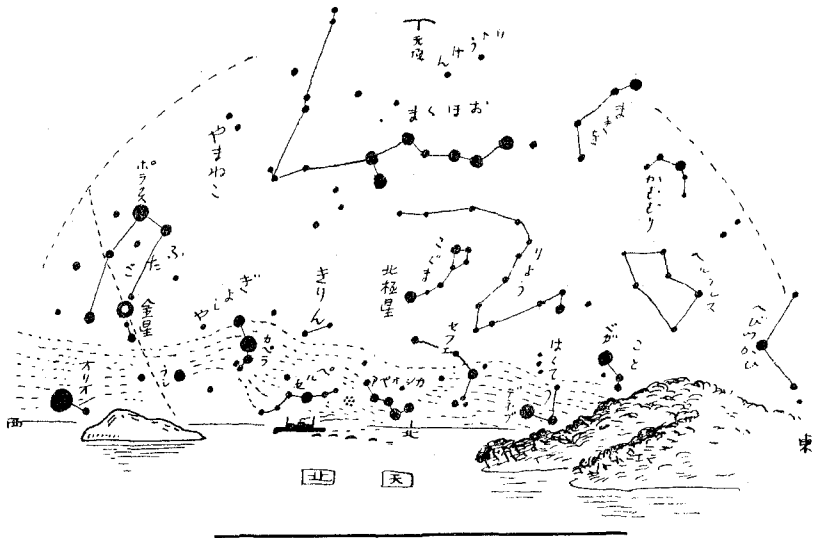
太陽系

水星の最大離角 本月上中旬は暁の東天によく見る事が出来て、殊に8日午後6時には西方最大離角26度25分となり、太陽よりも約1時間早やく4時頃に東天に昇る、小望遠鏡で見ると三日月型よりやゝ太い形にみられる。水星観望の好期は本年中では、此の頃と、7月の中旬から下旬にかけての宵の空の最大離角26度54分との二回丈が最好期である。

木星の四衛星消失 小望遠鏡で見て面白いのは此の四衛星の運動である。所が此の四つ共に見えなくなる時が本月起る、此の稀に起る現象も相憎と午後1時頃であるため米大陸以外では見られない。が一應説明すると、4日午前9時45分に第2衛星は掩蔽されて見えなくなり、次いで午前10時51分24秒には第4衛星も食となり、と殆んど同時(52分)に第3衛星は掩蔽終つて現はれるが、午前11時4分には第1衛星が木星面經過を始め、午後0時19分にはその影も木星面に投影される。斯くて3個の衛星は木星の前又は後にかくれて了つて、最後の第3衛星が午後0時24分42秒に食となる時から、全く四衛星の姿が見えなくなるのである。そして、約1時間の後午後1時20分第1衛星が木星面經過を終つて、木星の東側に離れる時から、又た常に何れかの衛星が必ず見えてゐる様になるのである。尙ほ斯かる現象は本年11月21日にも起るが、これも正午近くで我國からは見られない。其の後、7年あとの1939年7月16日までは、四衛星の内少なくとも1個は、常に必ず木星と並んで見えてゐるのである。

月と遊星との會合 3日午後10時57分に水星と會合。4日午前4時14分に天王星と會合し、同4日午前10時30分には火星と會合する。とんで10日午前1時35分に金星と會合してその北側を通り、13日午前6時58分には木星と會合する。翌14日午後8時42分に海王星と會合し、その北側半度程の所を通過する。25日午前2時17分土星と會合し、最後に31日午後1時27分に再び天王星と會合する。

遊星間の會合 7日午前5時に水星と天王星と會合し、水星は南側約2度半の所を通る。19日午前5時に水星は更に火星の南2度半の所を通る。(M I)



恒 星 界

花も過ぎて、若葉のものとのそぎる歩きにも、もう既に汗を感じる頃となつた。愈々春も半ばを過ぎて、空の星の景色にも、夏の星座「さそり」が東の方に現はれ始めて来た。銀河は殆んど地平線に沿ふて見え、大きな星の数は少なくなつて来たが、それでもまだ、ボルククス、プロシオン、カペラ、レグルス、スピカ、アークトゥラス等が輝き、既に夏の星たる、ウエガ、デネブ、アンタレス等も東の方から昇つて来る。

北斗は丁度北極星の眞上に懸つて、北極星の案内役をつとめてゐる。此の「おぼくま」星座は北斗七星に依つて有名であるが、七星のみならずもつと廣範圍を占め、多くの星を含んだ星座である。此の星座の南端には、二つ宛並んだ三組の星が略一直線上に等距離に並んで甚だ分り易い境界線を示してゐる。北斗七星の東から二つ目の星はミザールと言ふ、その傍にアルコルと言ふ、4等星が11分程離れてある。此の星は普通の天気状態なら大抵の人に見えるのではあるが、視力の検査によく使はれる星である。扱てミザールは二重星として最初に発見された歴史的星であつて、且つ二重星として寫眞に撮られた最初の星であり、且つ又た、その主星が分光的連星として最初に発見せられたものである。更らにその伴星並びにアルコルも共に又た二重星なのである。尙ほ此の星座で面白い事は、北斗七星の兩端二星を除いた内の五星は一樣な運動をして居り、此の五星と同じ運動をしてゐるものにシリウスや「さそり」座β星等がある。

「おとめ」星座の主星はスピカと言ふ。此の星と「まき」座の「アークトゥラス」と「しし」座β星と「りょうけん」座主星とは所謂「おとめのダイヤモンド」と言はれる四邊形を形造る。更らに此の四邊形に相似な形を「おとめ」星座内のスピカ、γ、ε、ζの四星でも形造つてゐる。尙ほ、此の星座内には渦状星霧が多い。

「かみのけ」星座は小さな星座ではあるが、銀河座標の北極が此の星座中にある。一體銀河に沿ふては星が多くその極になる程星は少なくなるのであるが、渦状星霧のみは極の方に多い。「おとめ」座に多いのも此の理由に依る。(M I)